

するにあつて、批評家の立場からでないのは勿論で、この標題の割書にも添へておいたのである。而してその題材發達の跡を辿るにあつて、その技術の發達を求めるのではない。蓋し、同時に一切をなし一切を語る譯に行かぬ爲である。それで、犍陀羅派も亦、その選んでゐる主題の點から見ても、我々に極めて興味のある考察點がある。何は兎もあれ、その美術家は、こゝでは全く自由であり、あらゆる方法を用ひて、苦もなくその對手である篤信者に對する力強い氣分を咬む事が出来たのであつた。世尊在世中の題材を専ら現はしてゐる浮彫、寧ろ高彫が驚く程多いのである。現にこゝで、佛陀の受胎から、その遺骨入塔までの間の、異つた挿話八十近くを數へて見る事も出来る位である。之と反對な然し附隨した傾向で、本生譚の方は、最初には思つた程にも少くはなかつたのが、遙かに其の數を減じて、今日までに發掘されたギリシア風佛教彫刻中では、漸く十を以て盡し得る事にならうと思ふ。佛陀前世の興味は、其同時代のものにすら力のないのは當然である。佛涅槃後の出來事に至つては、一見最早や之を考へるまでもなかつたので、僅かに一除